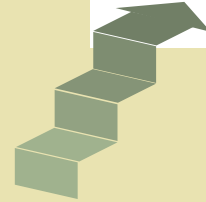


# 高崎でだるまを作り始めた頃 高崎田町の初市



**高崎だるま市**  
平成 29年 1月 1日(祝)、2日(月)  
高崎駅西口駅前通り  
1日: 午前 11 時から午後 6 時  
2日: 午前 9 時から午後 6 時  
※交通規制時間

ここは高崎城下、文政(1818~1830)の頃の正月十日。城下で初市が開かれ、中山道は押すな押すなの大にぎわいである。城下に住む絵師、青木周溪は人波に身をまかせながら街道を歩いていた。

初市は町衆の信仰を集める「市神様」のお祭りでもある。前夜からの酒盛りは大騒ぎであった。通りには色とりどりの幟や大きな飾り物が立ち並び、芝居小屋も立った。「さすがは当国一のにぎわい」と目をみはるばかりである。大きな歓声の方向に目をやると、商家の屋根から掛け声とともに餅がまかれていた。大人、子どもが押し寄せ「福を拾った」と大喜びであった。

人通りの多い一等地に浮世絵屋が店を出していた。役者絵や美人画をずらりと並べ、ずいぶんと繁昌しているようだ。浮世絵屋から出てきた男が連れの女の袖を引き、指差す先に、ねじり鉢巻き姿でだるまを売る男の姿があった。

「さあさあ、御用とお急ぎでない方は、寄っておいで見ておいで。」お江戸見たけりや高崎田町、細ののれんがひらひらと」と唄われているのが、この田町でございますな。中山道随一の宿場、高崎を過ぎますと、お江戸日

本橋から28里、豊岡の一里塚、その豊岡の山縣友五郎が丹精込めましたのが、ここに並べましたる、赤いだるまでございませう。

だるま売りは、一畳程度の屋台を広げ、台の上に大小10数個のだるまを並べていた。

「ほう、その娘さん、よく見て、おくんないやね。いやいや、あつしの顔でなくて、こつち、だるま。江戸で大評判の病除け、疱瘡除けのだるまでございませう。秘伝によりまして蘇芳から取り出しましたのが、この赤い色。」

売っているのは、真つ赤な江戸だるまである。江戸では疱瘡除けとしてだるまが庶民に広まっていた。古来から疱瘡(「天然痘」)は、命にかかわる疫病として、麻疹とともに恐れられていた。治療法がなく、祈禱やおまじないが唯一の手立てであった。

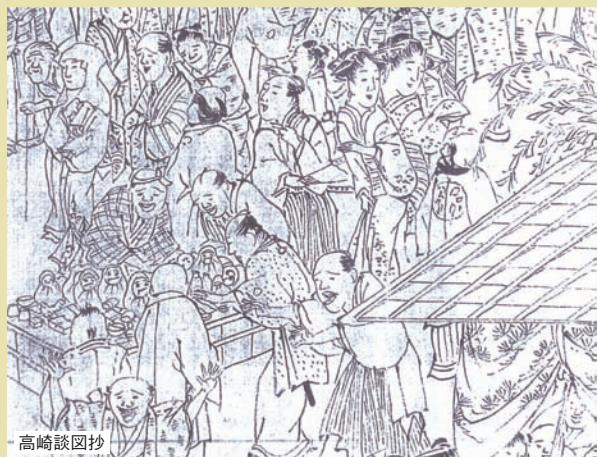
赤いだるまも疱瘡除けで大いに売れた。豊岡に住んでいた山縣友五郎という人物が江戸でだるま作りを習得し、戻ってきて始めたのが、高崎でのだるまの発祥という。

赤色が魔除け、病除けの不思議な力を持つと考えられたのは、人工的に作り出すのが難しい色であったためと言われ、だるまを塗る赤色塗料は貴重だった。当時、蘇芳から採った植物染料を使っていたが、その製法を友五郎

は秘伝としたので、江戸時代における高崎でのだるま作りは友五郎ゆかりの者に限られていた。だるま売りは口上を続けた。

「だるまの御利益は、まだまだございませう。このように転がしても起き上がり、人生七転び八起きでございます。」

初老の絹商がだるまを一つ買い求めた。「さて、今日のことを書きとめておきたいものだ」。周溪は家路を急いだ。こうして周溪は文政12年(1825)高崎の寺社旧跡や行事を記した「高崎談叢抄」30巻を書き上げた。その後、高崎のだるまが日本一となると、周溪も、友五郎も、この初市のだるま売りも思わなかったであろう。



高崎談叢抄

